

平成艸紙



おりおりの記

兜町雑感

日本証券クリアリング機構
代表取締役社長

深山 浩永

私は1978年4月に東京証券取引所に入所した。今年で兜町生活40年の節目に入った。

当時の兜町は立会場の町であったと思う。場内では場立が肉弾戦を繰り広げ、罵声が飛び交う異様な光景がしばしば見受けられた。昼休みともなれば、取引所周辺は立会場関係者で満ち溢れ、大変活気のある町であった。

兜町が転機を迎えるきっかけは、東証ビルの建替えである。単に新しい建物が建ち、景観が変わっただけではない。新立会場の狭隘化対策として市場二部銘柄の取引をシステム売買とし、世界に先駆けて1982年1月から実施した。二部銘柄の市場規模とシステム開発コストを秤にかけると、全く釣り合わない。正に大英断であったと思う。私は、当時の谷村東証理事長の深謀遠慮の結果と理解している。

システム売買導入後も10数年の間、立会場は取引の中心として存続したが、時代の流れには勝てなかった。様々な議論の末、市場集中義務が撤廃され、委託手数料の完全自由化が目前に迫る1999年4月に全上場銘柄がシステム売買に移行し、立会場は閉鎖された。私は立会場廃止計画を推進した課長の立場で、華やかな閉場式を迎えた。

こうした流れの中で、立会場関係者は配置転換等で徐々に姿を消し、証券会社の店舗の数も減っ

た。当然の結果として、兜町は寂れてしまった。

以上は昔話である。その後の兜町は、かつて証券会社の店舗があった場所

に、新しいオフィスビルやマンションが建った。町の雰囲気は大きく変わったが、関係者の努力で東証アローズの見学者やイベント参加者も増え、それなりに賑わいが戻ってきている気がする。

近年、フィンテック論議が喧しい。特にビットコインに代表される資金決済面が注目されている。現在、私が携わっている清算・決済業務に多大な変化をもたらすかもしれない。それなりの研究に取りかかっているものの、現時点では見当がつかない。ネット取引の普及やHFTの出現のように既存インフラの延長で対応できれば問題ないが、業務の根柢を覆すような技術革新だと甚だ厄介である。しかし、乗り遅れるわけにはいかない。

こうした潮流の中で兜町はどの様な姿になるのだろうか。再開発後の兜町に期待したい。

